

『神学大全』は誰のために書かれたのか

加藤和哉

はじめに

トマス・アクィナスの『神学大全』が誰のために書かれたのか。『神学大全』の解釈にとって、この問いは、一般にあるテキストの成立事情を明らかにするといった関心からなされるような背景的な考察課題ではない。なぜなら、トマス自らがこの著作の冒頭で異例とも見える仕方¹⁾、この著作を誰のために書くのかということを明らかにしているからである。

普遍的真理の教師は、成熟した者たちを指導しなければならないだけでなく、使徒の言葉に「キリストにおいては幼児である人々に対してのように、飲み物として乳を与え、食物は与えなかった」とあるとおり、初心者たちを教育することもまた彼の職務に属しているのであるから、この著作において私たちの意図するところは、キリストの宗教に属する事柄を、初心者たちの教育に適した方法で伝えることである²⁾。(『神学大全』第I部序言、下線引用者)

聖句を引用し、これを敷衍して、著作意図を説明することはこの時代の神学テキストでは極めて一般的なことであるが、このトマスの序言は

1) トマスは他の多くの著作の冒頭でも、執筆意図、主題、構成などを述べる序言ないし序論的部分を置いてはいるが、そこで述べられる執筆意図はあくまで一般的・抽象的な次元のものである。これに対して『神学大全』では以下で述べるように個別的・具体的な動機が語られる点で異例である。

2) *ST I, prologus.*

そのような慣例にただ従っただけのものであるとは思われぬ。トマスは、続けて「初心者たち *incipientes*」のために書くという執筆理由には、ある具体的な動機があるという。彼によれば、これまで様々な人々によって著された書物は、これらの人々（「この学知の入門者たち *huius doctrinae novicii*」と置き換えられている）にとって以下の三つの点で妨げになっている。すなわち、それらの書物には、①不要な問題、項、論証が多く、②知る必要のある事柄が学習の順序に従って叙述されておらず、③同じ事柄が頻繁に反復されることで学習者の意欲を削ぎ、混乱させるといった欠点がある³⁾。「問題」「項」「論証」といった問題形式に言及するとみられる表現があることからすれば、トマスがここで批判しているのは、主として問題形式で著された同時代の神学的テキストであり、具体的には、大学の神学教授たちが著した『命題集注解』を初めとする注解や「討論集」などを指すと思われる（トマスは、著述の順序が不適切である理由として、それらの著作が「書物の読解上の必要」や「討論の機会」に応じて書かれたことを挙げている⁴⁾。前者が「注解」、後者が「討論集」というジャンルに該当すると考えられる）。そして、トマスはこれから始める自らの著述においては、これらの難点を避けて、可能な限り「簡潔かつ明瞭に」述べるよう努めるとしているのである⁵⁾。

つまり、『神学大全』は「初心者」の教育のために、彼らに必要なことだけを、適切な学習の順序にしたがい、有害な繰り返しを避けて、簡潔明瞭に述べたものであるということになる。本論考は、トマスがここで念頭においている「初心者」とはどのような人々のことであり、また彼らの教育に適した方法によって書かれたとされる『神学大全』の神学⁶⁾がどのようなものであるのかを考察するものである。

3) Cf. *Ibid.*

4) Cf. *Ibid.*

5) Cf. *Ibid.*

6) 「神学」という名称をトマス自身は、キリスト者が信仰から出発して行う神学と、信仰に依拠しない哲学者たちの神学との両方を含む一般名詞として用いている (Cf. *ST I, q. 1, a. 1, ad 2*)。前者について、トマスは伝統的な名称の一つである「聖なる教え *sacra doctrina*」を用いている。しかし、問題はトマスが『神学大全』において、この「聖なる教え」の下にいかなる神学を構想したかであり、以下考察するのはその神学のことである。

1. 論 争

『神学大全』の序言で「初心者」ないし「入門者」と呼ばれるのがどのような人々のことであるのかという問題については、既に研究者たちの間で論争がなされてきた。Leonard E. Boyle は、主として歴史的な考察に基づいて、『神学大全』執筆時にトマスが念頭に置いていたのは、「若い、ありふれたドミニコ会員」(p. 8)であり、より高度な教育を受けた聴講者、たとえば大学生ではないと主張した⁷⁾。Boyle がこの推定の根拠としているのは、トマスが 1266-67 年頃と推定される『神学大全』執筆開始時には、ローマのサンタ・サビーナに新たに創設され、彼が指導を委ねられたドミニコ会の学院で、ドミニコ会の若者たちに教えていたこと、その時には、じきに(1268年)パリ大学に呼び戻され、教授として再び教えることは予想されていなかったことなどである。確かに、執筆時の歴史的背景という点からはそう推定することが可能である。最近でも、Brian Davies が Boyle の推定に基本的に同意している⁸⁾。

これに対して、たとえば John I. Jenkins は、この書物の構成や内容の点から異議を唱え、逆にこの書物はまさにパリなどの大学において神学教授になろうとする者たちのために書かれたものであると主張した⁹⁾。Jenkins によれば、『神学大全』は、数多くの困難で論争的な主題を扱っており、多くは民衆に対する説教や聴罪の仕事にあたることが想定されていた「ありふれたドミニコ会員」にはおおよそふさわしくない¹⁰⁾。この著作はまさに、パリやオックスフォードなどの大学で神学教授になるために高度な神学教育を受ける学生たちのために書かれたものであると主張した¹¹⁾。他にも、その中間をとって、一般の修道士の教育のため

7) Cf. Leonard E. Boyle, O.P., *The Setting of the Summa Theologiae of St. Thomas Aquinas – Revisited*, in: Stephen J. Pope (ed.), *The Ethics of Aquinas*, Washington, D. C. 2002, p. 8.

8) Cf. Brian Davies, *Thomas Aquinas's Summa Theologiae, A Guide and Commentary*, Oxford, 2014, pp. 10-13.

9) Cf. John I. Jenkins, *Knowledge and Faith in Thomas Aquinas*, Cambridge, 1997, pp. 85-90.

10) *Ibid.*, p. 86.

11) Cf. *Ibid.*, p. 90. Brackfriars 版の羅英対訳版の欄外注でも、incipientes について、「もともと職業的の神学研究を始めた者のことであるが、現在ではキリスト教において論拠を

も、大学の神学教授養成のためでもなく、ドミニコ会の学院で一般の修道士を教える神学教師の養成のためであったという見解も提出されている¹²⁾。

ただ、Boyle も (Davies も)、歴史的背景はいわば状況証拠であって、トマスの序言がこの推定を明確に根拠づけるものであるとまではいえないと考えている。また、Jenkins 自身も認めている様に、そのような高度な教育段階にある学生が、なぜ「初心者」「入門者」などと呼ばれているのかには疑問が残る。Jenkins は、ピアニストを例に、ピアノを習い始めたばかりの「初心者 beginner」だけではなく、デビューしたての若いコンサート・ピアニストも熟練したプロのピアニストに対してはまだ「初心者」と言えるなどという苦しい説明を付しているが¹³⁾、テキスト上の根拠や歴史的な用例の裏付けを挙げているわけではない。

ではいったいいかに考えるべきか。歴史的考察は背景説明としてはもとより考慮すべきではあるが、トマスが現実に誰を教えていたかということからこの著作意図を説明することには、何らかの必然性を見出すことはできないように思われる (トマスの時代とはテキストの成立事情も流布の形態も異なるとはいえ、私たちが著作を書くときに、必ずしも日々教室で相手をしている学生のことを、あるいはそれを第一に考えているとは言えない)。

この問題の解決のためには、やはりまずトマス自身の述べるところを正確にとらえることから始めなければならないだろう。ここでは、まずこの序言における「初心者たち incipientes」という言葉で¹⁴⁾、トマスが

探求するすべての人にまで拡大される」と注記している。St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, vol.1: Christian Theology (Ia.I), Latin text and English translation, Introductions, Notes, Appendices and Glossaries, Th. Gilby O.P., 1964, p. 2.

12) Cf. Mark F. Johnson, Aquinas's *Summa theologiae* as Pedagogy, in: Ronald B. Begley & Josef W. Koterski, S. J. (ed.) *Medieval Education*, New York, 2005, pp. 139-140. 他にも、J.-P. Torrell は、初心者用のテキストといいながら、余りに高度な内容であることについて、トマスが学生の資質を過大評価していたからか、トマス自身はこの程度の内容ならそれほど難しいとは思わなかったからなのかもしれないと述べている。Cf. J.-P. Torrell O.P., *Initiation à saint Thomas d'Aquin, Sa personne et œuvre*, Paris, 1993, p. 211.

13) Cf. Jenkins, op. cit., p. 89.

14) 以下では、さしあたり「初心者」という概念に絞って考察している。「この学の入門者たち novicii」と言われているものが、「初心者」と同一かどうかは検討の余地はある。ただ、以下の考察が正しければ、「この学の入門者」も「初心者」と同じ特質を持つ者とし

何を意味していたのかをさぐることから始めたい (2, 3)。次いで、トマスがその人々のために適したものとして構想した神学がいかなる性格を持ち、いかなる方法をとるものであるかを考察することにしたい (4, 5, 6)。というのも、ある人々に相応しいものとして考えられたものの固有性が明らかになれば、それが相応しいとされる人々の固有性も明らかになると思われるからである。

2. 「キリストにおける幼児たち」——『神学大全』序言の解釈

Boyle なども指摘しているように、短い序言のテキストだけで、ここで「初心者たち」等と呼ばれている人々がいかなる人々であるかを明らかにするのは困難である様に思われるかもしれない。しかし、重要な手掛かりがある。それは、「初心者たち」を教育することが、神学の教師の務めであることを述べる際に引用されるパウロの『コリントの人々への第一の手紙』3章1-2節のテキストである¹⁵⁾。トマスは、この序言で「初心者たち」を、パウロのテキストにある「キリストにおける幼児たち *parvuli in Christo*」に喩えているのである。周知のように、パウロが「キリストにおける幼児たち」(新共同訳「キリストとの関係では乳飲み子」と呼んでいるのは、当時コリントの教会で、派閥争いを繰り返す「お互いの間にねたみや争いが絶えない」(3:3) 状況にあった人々のことである。私には、この序言の意味するところは、この比喩を読み解くことなしには正しく理解できないように思われる(この比喩の解釈問題が、序言の解釈者たちの目を逃れてきたことは、奇妙ですらある。というのも、このコリント前書のこの前後の箇所は神学の方法を論じる際に、たとえばアウグスティヌスが三位一体の神学の方法を論じる際にも持ち出している箇所であり¹⁶⁾、トマスと同時代の神学者たちによってもしばしば引証されるものでもあるからだ¹⁷⁾)。

で考えられていると言っただけでよいと思われる。

15) 以下、聖書の原文としては、トマスが用いているラテン語訳を扱う。異説が問題にならない限り、引用はヴルガタ版による。また、聖書の翻訳は、トマスの用語と整合的であるように訳出した。

16) Cf. Augustinus, *De Trinitate*, I, 1, 3.

17) Cf. Alexander Halensis, *Summa Theologica*, I, tract. introduct., q. 1, cap. 4, a. 3, ad 1; Bonaventura, *In I Sent.*, proem.; Albertus Magnus, *Summa Theologiae sive de mirabili*

パウロは、この箇所在先立つ部分で、彼の福音宣教の核であるキリストの十字架の宣教が、「この世の知恵」(1:20)とは異なる「神の知恵」(1:21)によるものであることを明らかにしている。「この世の知恵」は、「言葉の知恵」(1:17)「人間の知恵」(2:5)とも呼ばれ、それを持つのは「知者」,「学者」,「この世の探求者」(1:20)であるとされ、ギリシア人が求めているものであるとされている(1:22)。その知恵は、「優れた言い方」(2:1)「説得的な言葉」(2:4)を用いるものである。他方、「神の知恵」は、「神秘のうちにある隠された知恵」(2:7)であり、「完成された人々 *perfecti*」(2:6)に対して語られるものである。その知恵は「霊 *spiritus*」(2:12)を通して私たちに示されたものであり、「人間の知恵の学びの言葉」(2:13)ではなく、霊的なことに霊的なことを結びつける「霊の教え」(2:13)によって与えられるのである。そして、こうした霊を受けた「霊的人間 *spiritualis* はすべてを判断する」(2:15)ことができると言われる。

これに対して、「キリストにおける幼児たち」と呼ばれるのは、そのような「霊的人間」(2:15; 3:1)ならざる「肉的人間 *carnalis*」(3:1)のことなのである。トマスはこの箇所に対する彼自身の注解で、「キリストにおける幼児たち」とは、「完全なる信仰の教え *doctrina fidei* にまだほとんど導き入れられていない人々」であると注釈している¹⁸⁾。つまり、霊的な神の知恵と言葉の説得によるこの世の知恵の対比、前者を受け取ることのできる霊的人間とそうでない肉的人間の対比というパウロ書簡のモチーフは、神学とはいかに語られるべきかというトマス自身の問題意識に合致するものとして理解されているのである(それは偶然ではなく、先にも触れたように、このコリント前書の箇所がアウグスティヌスをはじめ教父的伝統における神学的思考の源泉の一つとなってきたものだったからであると思われる)。したがって、『神学大全』冒頭でこの箇所が引用されることは、単なる比喩的引証以上の強い意味をもっていると考えらるべきであろう。

では、このような「キリストにおける幼児たち」「肉的人間」である

scientia Dei, I, pars I, tract. I, q. 5, cap. 4.

18) *Super I Cor.*, cap. 3, lect. 1.

「初心者たち」とは一体どのような人間であるとトマスは考えているのだろうか。

3. 「初心者たち」——靈的な成長の三段階

トマスは、人間の靈的な成長を主題的に扱うテキスト（『神学大全』第Ⅱ-Ⅱ部第183~184問題）で、人間が、この生における靈的成長にしたがって「初心者 incipiens」「熟達者 proficiens」「完成者 perfectus」（創文社版邦訳では「初歩者」「進歩者」「完全者」）の三つに区別されることについて論じている¹⁹⁾。トマスにおいては、この靈的な成長は、人間の内なる「愛徳 caritas」の成長と結びつけられる。「完成者」とは、この生において可能な限りの愛徳の完成に達した人であり、彼の心からは愛徳に反対対立するような一切の情動が排除されているとされる²⁰⁾。これに対して、「初心者」とは、罪から離れ、また愛徳に反対対立する情欲の動きに抵抗し始めた者²¹⁾、逆に言えば、そのような無秩序な情動がまだ心から排除されていない人を指すのである。「熟達者」は「初心者」「完成者」との中間にあって、愛徳の完成に向けて努める人々である²²⁾。先のコリント前書の引用とともに提示される「初心者」という概念は、第一にこの靈的成長における最初の段階を指すものとして用いられていると考えられるのではないか。

確かに「初心者 incipiens」の語も、「初心・熟達・完成」の三段階も、人間のあらゆる「精進・努力 studium」について見いだすことができる²³⁾、「初心者 incipiens」という概念自体がただちに靈的な成長の第一段階を意味するとする必然性があるわけではない。問題となるのは、靈的段階の「初心者」の特質と、序言において触れられる「初心者たち」の特質が一致すると考えられているかであろう。その点を次は、『神学大全』においてトマスが構想する神学に与えられている性格

19) Cf. ST II-II, q. 183, a. 4, co. 人間の靈的成長を三段階に区別することについては、教父以来の長い伝統がある。Cf. Reginald Garrigou-Lagrange, *Les Trois Âges de la Vie Intérieure*, Vol. I, Paris 1938, pp. 112-116.

20) Cf. ST II-II, q. 184, a. 2, co.

21) Cf. ST II-II, q. 24, a. 9, co.

22) Cf. Ibid.

23) Cf. ST II-II, q. 24, a. 9, co.

づけを考察することを通して明らかにしたい²⁴⁾。

4. 二種類の知恵

トマスは、『神学大全』第 I 部冒頭の神学論（第 1 問題）において、この著作で扱う「聖なる教え」の神学を知恵であると規定するが、その際、興味深い区別を立てている。すなわち、知恵に帰せられる固有の働きである「判断する iudicare」ことに二通りのあり方があることから、知恵にも二種類あるとされるのである²⁵⁾。

第一の方式は「傾向性 inclinatio」によって判断することである。挙げられている例は、「有徳者 virtuosus」が有徳であるかぎりにおいて、徳に基づいて為すべき事柄について正しく判断する場合である。他方、第二の方式は「認識 cognitio」によって判断することである。例としては、倫理学を学んだ者が、理性の探究によって正しく判断ができる場合が挙げられている²⁶⁾。トマスは、後者の場合には「たとえ徳を持たないとしても etiam si virtutem non haberet」²⁷⁾徳の関わる事柄について正しい判断ができることを強調している。

そして、知恵とは神的な事柄について判断するものであることから、判断のこの二つの方式に従って、知恵も二通りに区別されることになる。第一には、「傾向性」によって判断する知恵であり、これが「聖霊の賜物 donum」である限りの知恵であるといわれる。これについては、「聖霊の賜物」としての知恵について詳述する別のテキスト（第 II - II 部第

24) 用語上の観点からは、霊的成長が incipiens, proficiens, perfectus の三段階に区別されているのに対して、『神学大全』第 I 部序言で incipientes と対置されているのが「成熟した者たち」と訳した proveci であることが問題になるかもしれない。この proveho の過去分詞形は、トマスのテキストではあまり用例の多い語ではなく、子どもに対して「大人、成人」を意味するのが一般的な用例である（Cf. *Sententia Politic.*, III, lect. 1, n. 5.）。人間の霊的段階に関係のある用例としては、『コリントの人々への第一の手紙』の当該箇所とはほぼ同じモチーフを持つ『ヘブライの人々へ手紙』の箇所（6:1-2）に対する標準聖書注解で、子どもじみたあり方を離れ、霊的な高みを目指す「大人」のあり方を指す用例があり、これをトマスも参照している（Cf. *Super Heb.*, cap. 6, lect. 1.）。その場合、「成熟した者・大人 provecus」とは、霊的な完成へと歩み進めている「熟達者 proficiens」及びその到達点である「完成者 perfectus」を含むことになるだろう。

25) Cf. *ST I*, q. 1, a. 6, ad 3.

26) Cf. *Ibid.*

27) *Ibid.*

45 問題) では、当の事柄への「親近性 *connaturalitas*」による判断であるとも言われている²⁸⁾。

この文脈で、序言でも引用される『コリント人への第一の手紙』が引用されていることは特記に値するであろう。すなわち、「霊的な人間」「完成者」はこの第一の方式で、神的事柄について判断できる人々であるとされているのである²⁹⁾。また、そのような「親近性」は「愛徳」によって生じるとされていることも³⁰⁾、先に人間の霊的な成長段階の一つとしての「完成者」について見たところと合致している³¹⁾。

他方で、『神学大全』の神学に帰せられる知恵は、もう一つの方式での判断によるものである。第 I 部第 1 問題の当該のテキストでは、この認識方法については「精進・努力 *studium*」³²⁾によるとされるのみで詳しい説明がないが、これを先に触れた「聖霊の賜物」としての知恵について論じるテキストでなされる区分に重ねるならば、「理性の完全な使用に基づいて *secundum perfectum usum rationis*」「理性の探求によって *ex rationis inquisitione* 正しい判断をもつ」³³⁾ものであることになる。

ところで、「聖霊の賜物」としての知恵が論じられる際には、第一の方式で判断する「聖霊の賜物」としての知恵に対置されるのは、「知性的徳 *virtus intellectualis*」としての知恵であることが問題になるかもしれない。トマスは、一般的には「聖なる教え」の「知恵」と哲学者たちにも（も）帰せられる「知恵」との間に区別をたてているからである³⁴⁾。しかし、哲学者たちの「知恵」と「聖なる教え」の「知恵」とが異なるのは、前者が被造物を通して認識可能な事柄のみを扱うのに対して、後者がそれだけでなく、「さらに *etiam*」³⁵⁾啓示によって伝えられたことをも扱うというだけである。それは、出発点におく原理が異なる（「異な

28) Cf. *ST* II-II, q. 45, a. 2, co.

29) Cf. *ST* I, q. 1, a. 6, ad 3.

30) Cf. *ST*, II-II, q. 45, a. 2, co.

31) 注 20 参照。

32) *ST* I, q. 1, a. 6, ad 3.

33) *ST* II-II, q. 45, a. 2, co. Cf. II-II, q. 9, a. 1, ad 1.

34) Cf. *ST* I, q. 1, a. 6, co; *Super de Trinitate*, q. 2, a. 2, co.

35) “*sacra doctrina... non solum quantum ad illud quod est per creaturas cognoscibile, ... sed etiam quantum ad id quod notum est sibi soli de seipso et aliis per revelationem communicatum.*” *ST* I, q. 1, a. 6, co.

る」というより、「加わる」のであるが) だけであって、「理性の探究によって *ex rationis inquisitione*」あるいは「理性の推論を通して *per discursum rationis*」³⁶⁾判断するという認識の仕方においては違いがないと思われる。この知恵は「その原理を啓示から得るのではあっても、精進・努力によって得られる」³⁷⁾という説明はそのようなことを意味すると思われる。

さらに、この神学的認識が、何らかの「傾向性」に基づくものではないとされていることも興味深い。この「傾向性」は「愛徳による親近性」に基づくものであるから³⁸⁾、聖なる教えの知恵とは、愛徳によってそなわる「親近性」を有しなくても、神的な事柄について正しく判断できるものであることになる(トマスが挙げる倫理学の例で「たとえ徳を有しなくても」とされていることは、徳によってそなわる「傾向性」ないし「親近性」がなくても、と解されるからである)。

ここであらためて先に考察した「肉的人間」である「初心者」と「霊的人間」である「完成者」との対比を考えてみるなら、聖なる教えがまさに「初心者」のためのものであるとされたことの意味が明らかになるのではないか。「霊的人間」「完成者」は、愛徳の完成を有し、愛徳に反対対立する情動を有しないものであるとされた³⁹⁾。これに対して、そうではない「初心者」は、愛徳を備えていないわけではないし、そのかぎりで「知恵の賜物」も有していることにはなるかもしれないが⁴⁰⁾、それらは不完全であり、彼の内には愛徳と反対対立する情動の動きとの葛藤があるのであって、だからこそ、かれは自らに備わる「傾向性」「親近性」に従うだけでは正しく判断することはできないことになる⁴¹⁾。

実際、トマス自身も、知恵、すなわち神的な事柄についての正しい判

36) *ST* II-II, q. 9, a. 1, ad 1.

37) “(hac doctrina) per studium habetur, licet eius principia ex revelatione habeantur.” *ST* I, q. 1, a. 6, ad 3.

38) 注 30 参照。

39) 注 20 参照。

40) トマスは、「聖霊の賜物」としての知恵は恩寵を与えられた者すべてに備わるとするが、それが必ずしも実際に働きにおいて表れるわけではないと考えている。Cf. *ST* II-II, q. 45, a. 5, ad 3.

41) トマスによれば、恩寵を与えられた人間であっても、感覚的欲求の運動をすべて押さえることはできないので、罪を免れることはできない。Cf. *ST* I-II, q. 109, a. 8, co.

断の二つの在り方を霊的な段階として「初心者」と「完成者」に重ねて理解していると思われる。トマスは『コリントの人々への第一の手紙』の2章15節の「霊的人間はすべてを判断する」という箇所について、これが「有徳者」と同様の仕方では判断するということを述べるものだと解している⁴²⁾。これに対して、何らか欠けるところのある「初心者」は、そのような内なる傾向性や親近性によるだけでは正しく判断できないのである。したがって、彼が神について正しく認識するには、理性の探究によるしかないことになる（あるいは、自らの霊的成長を待つしかない）。

5. 知性的徳としての聖なる教え

さらに、トマスが「聖なる教え」の神学に与えているもう一つの特徴として、これが「思弁的知識 *scientia speculativa*」であるとされていることにふれておきたい。

トマスは、「聖なる教え」が、実践的知識であるという側面と思弁的知識であるという側面を両方持つとしながらも、最終的には、思弁的知識であると結論づけている⁴³⁾。このことは、トマスの師であったアルベルトゥス・マグヌス、トマスと一時期同僚であったボナヴェントゥラ、その師であったヘルズのアレクサンデルといった同時代の神学者たちのいずれもが、同様に神学に両方の性格を認めつつも、最終的にはこれが実践的知識であるとしていることと好対照をなしている⁴⁴⁾。これらに対して、トマスは、アルベルトゥスの指導の下で始めたかもしれないと言われている初期の『命題集注解』から一貫して、思弁的知識であるという立場をとっているのである⁴⁵⁾。

さらに、興味深いのは、神学に認められる実践的な性格が、トマスと他の3人とで全く異なることである。トマス以外の3人においては、神学がまさに人間の「情意 *affectus, affectio*」を完成させるものであり、

42) Cf. *Super I Cor.*, cap. 2, lect. 3.

43) Cf. *ST I*, q. 1, a. 4; a. 5.

44) Cf. Alexander Halensis, *Summa Theologica*, I, tract. intro., q. 1, cap. 1, solutio; cap. 2, contra f; Bonaventura, *In I Sent.*, proem., q. 3, conclusio; Albertus Magnus, *In I Sent.*, distinct. I, A, art. 4; Albertus Magnus, *Summa Theologiae*, I, pars I, tract. I, q. 3, cap. 3.

45) Cf. *In I Sent.*, prologus, q. 1, a. 3, qc. 1.

それによって人間を善きひとにし、善き行いへと向かわせるという主体的な観点に、実践的な性格が見出されている。これに対して、トマスが聖なる教えに実践的性格を認めるのは、これが「人間の諸活動 *actus humani*」を扱うという対象的な観点においてなのである⁴⁶⁾。そしてそれは、人間が諸活動を通して、永遠の至福であるところの神の認識（「神の本質の直視 *visio divinae essentiae*」⁴⁷⁾）に至るといふ思弁的な目的のもとに位置づけられるとされるのである⁴⁸⁾。それは、実際に『神学大全』第Ⅱ部にトマスが与えた位置づけでもある⁴⁹⁾。

この点については、確かに最初期の『命題集注解』では、神学は「人間を正しい働きにおいて完成する」⁵⁰⁾とも言われており、これはアルベルトゥスらに近い表現である。しかし、より後のテキストでは、人間が「いかにして善き働きによって、神へと至るのかを教える」⁵¹⁾と述べられており、これと『神学大全』のテキストとを合わせて考えれば、神学の学びはその実践的性格においても、実際に人を善き人たらしめるものではなく、その限りではむしろ「思弁的」な倫理的知識にとどまる⁵²⁾というのがトマスの最終的な立場であると言ってよいであろう。このことからすれば、トマスの場合、神学的知恵の知性的徳としての性格は、たとえば情意の陶冶を前提とし、これと結びつくようなものであるために、倫理徳のうちにも数えられる知性的徳である賢慮 *prudentia* のようなものよりも、純粋な知性的徳に近いものであると言ってよいであろう⁵³⁾。トマスは「聖なる教え」をひとが学ぶことによって、ひとが善きひとになり、善き行いができるようになるとは考えていなかったように思われ

46) Cf. *ST I*, q. 1, a. 5, co.

47) Cf. *ST I-II*, q. 3, a. 8.

48) Cf. *ST I*, q. 1, a. 5, co.

49) Cf. *ST I*, q. 2, intro.

50) *In I Sent.*, prologus, q. 1, a. 3, qc. 1.

51) *Lectura romana in I Sent.*, prologus, 3. 1.

52) トマスは、知識の思弁的性格と実践的性格については、①対象、②方式、③目的の三点から区別されるとし、端的に実践的性格を有するのは、目的の観点で実践的なものだけであるとしている (Cf. *ST*, Ia, q. 14, a. 16, co.)。

53) トマスにおいて、「行為において導く」というより強い意味での実践的性格が与えられているのは、「聖霊の賜物」としての知恵や知識である。Cf. *ST II-II*, q. 9, q. 3, co.; q. 45, a. 3, co.

るのである⁵⁴⁾。

6. 二種類の神学

確かに、トマスも、神学者の仕事、つまり神学の営みが「初心者たち」だけのためのものであるとまでは言っていない。序言でも、「成熟した者たちを指導すること」にも触れられていた。

トマスもまた、ボエティウスの『三位一体論』について注釈する中で、「聖書の教師には、知者たちにも愚者たちにも教える義務がある」ことに触れている。しかし、それは「同じものを両者に提示するのではなく、それぞれにふさわしいものを提示すべきだ」というのである⁵⁵⁾。すべての人が知るべきことは、隠されることなくすべての人に示されるべきである一方で、そうでないこともある⁵⁶⁾。

特にそこで問題になると思われるのは、「初心者たち」には近づきがたく、また理解できず、したがってまた誤謬や混乱のもとともなりかねない「神秘 *mysterium*」や「奥義 *occultum*」であったと思われる。当時のある神学者たちにとっては、隠された神秘的な表現によって神的な事柄について伝えることこそ、神学本来の仕事であった⁵⁷⁾。そこでは聖霊の恩寵に先導されて隠されたものを探求することが神学であるとされた⁵⁸⁾。

これに対して、トマスが『神学大全』において展開する神学は、確かに啓示によって与えられたものをも出発点とはするものの、その歩み自体は、誰もが（「初心者」「愚者」ですら）持つ理性によるものであると考えられていると思われる。この点で、この神学における聖書解釈について、トマスが述べていることが興味深い。『神学大全』の神学は、啓

54) トマスは、フランシスコ会の二人の神学者が共に持ち出している『集会の書』（シラ書）の聖句の解釈に基づいて、「知恵 *sapientia*」が「味 *sapor*」と同じ語源を持ち、そこから知恵は情動に働きかける性格を持つという説明について、それはラテン語だけでしか言えないから、聖書解釈としては間違いだと切って捨てている。Cf. *ST II-II*, q. 45, a. 2, ad 2; Alexander Halensis, *Summa Theologica*, I, tract. intro., q. 1, cap. 1, solutio; Bonaventura, *In I Sent.*, proem., q. 3, conclusio.

55) *Super de Trinitate*, q. 2, a. 4, ad 4.

56) Cf. *Super de Trinitate*, q. 2, a. 4, co.

57) Cf. Alexander Halensis, *Summa Theologica*, I, tract. intro., q. 1, cap. 4, a. 2, ad 3.

58) Cf. Bonaventura, *In I Sent.*, proem.

示によって与えられ、信仰によって受容される事柄を出発点とする論証によって成立するとされるが⁵⁹⁾、その論証は、聖書の靈的意味の解釈ではなく、字義の意味の解釈のみに基づくものであるとされるのである⁶⁰⁾。しかも、靈的意味は、すべて字義の意味に還元されるものであり、それによって不足するところは何もないとまで言い切られているのである⁶¹⁾。

以上から、トマスが『神学大全』の序言で「初心者たち」にふさわしいと考えていた聖なる教えの神学がいかなるものであり、またいかなるものではないかということが明らかになるだろう。一方には、当時一般的であった聖書の靈的解釈を駆使した神学がある。トマスもこれを否定するわけではないが、それは少なくとも「初心者」たちにはふさわしいものではない。「靈的解釈」は靈的人間にのみ完全に認識できるものであって、そうではない「初心者」たちは、聖書の字義の意味に基づき、理性による「論証」をすることがふさわしいのである。その対比を名付ければ、トマスが示そうとしたのは、いわば自らのうちに注がれた恩寵にしたがって、靈的な認識に基づいて行う「恩寵的・靈的」神学に対して、それがふさわしくない「初心者」たちのための「理性的・文字的」神学とでもいうべきものであったと言えるのではないか⁶²⁾。

7. 「初心者たち」のための神学

おわりにあらためて『神学大全』が誰のために書かれたのかを述べるとすれば、それは信仰を有していないか、あるいは有していても愛徳の完成に至ってはいない「初心者たち」であることになる。もちろん、トマスがこの著作の執筆にあたって、当時の意味における「不信仰者 infideles」、つまりイスラム教徒などの異教徒を第一に念頭に置いていたと考える必然性はない⁶³⁾。しかし、洗礼を受けたという意味ではキリスト

59) Cf. *ST I*, q. 1, a. 2, co.; a. 8, co.

60) Cf. *ST I*, q. 1, a. 10, ad 1.

61) Cf. *Ibid.*

62) トマスが、『命題集注解』から『三位一体論』注解、『対異教徒大全』を経て『神学大全』に至る神学的方法の探求の道筋を経て確立した神学は、明らかにこの「理性的・文字的」神学であったと言ってよいだろう。トマス自身がもう一つの神学にどこまで関心を持ち、それを自らの務めとしたかは興味深いが、この論考の考察の範囲を超える。

63) ただし、トマスが、彼の神学の少なくとも一部分は全くの不信仰者にも通用する

教徒であった当時の大部分の人であっても、いったん与えられた恩寵を失うような「大罪 peccatum mortale」を犯すことはありうるし⁶⁴⁾、また自らが恩寵を有していることも、愛徳を有していることも確実に知ることはできないとされる⁶⁵⁾。とするなら、ひとは（たとえキリスト者であっても）自らが「完成者」であると自認することはできず、むしろ「初心者」であるとみなすべきであることになろう。こうして、聖書の字義的解釈（加えて、教父や哲学者たちの知恵⁶⁶⁾）から出発し、自らに備わる理性によって、「霊的人間」ならざるすべての人間が、神の真理を考察することが、トマスが『神学大全』で提示しようとした「初心者たち」のための神学であったのではないかと思われる⁶⁷⁾。

使用テキスト（脚注では、トマスの著作には著者名を記さなかった）

Thomas Aquinas, *Summa Theologiae* (ST), cura et studio P. Caramelo OP, cum textu ex recensione Leonina, Taurini & Roma: Marietti, Pars Ia et Ia IIae (1952), Pars IIaIIae (1962).

Thomas Aquinas, *Commentum in Lib. I Sententiarum* (In I Sent.), Opera Omnia, studio et labore S. E. Fretté and P. Maré, vol. VII, Paris: Vivés, 1873.

Thomas Aquinas, *Expositio super liberum Boethii de Trinitate* (Super de Trinitate), ad fidem codicis autographi nec non ceterorum codicum manuscriptorum, recensuit B. Decker, Leiden: E. J. Brill, 1965.

Thomas Aquinas, *Lectura romana in primum Sententiarum Petri Lombardi* (Lectura romana in I Sent.), ed. Leonard Bolye, OP and John F. Boyle, Tronto: PIMS, 2006.

その他のテキストは、Corpus Thomisticum (<http://www.corpusthomisticum.org/>) によった。

ものであると考えていたことは確かである。Cf. ST I, q. 1, a. 8, co.; *Summa contra gentiles*, I, 2.

64) Cf. ST I-II, q. 109, a. 8, co.; II-II, q. 24, a. 12, co.

65) Cf. ST I-II, q. 112, a. 5, co.; *De Veritate*, q. 10, a. 10, co.

66) 本論考では論じることができなかったが、トマスの神学においては、いわば神から直接与えられた知恵を示す啓示（聖書）に加えて、権威を認められた教父や哲学者たちの知恵も重要な役割を果たしている。Cf. ST I, q. 1, a. 8, ad 2; *Lectura romana in I Sent.*, prologus, 4. 4.

67) このように考えれば、とりわけトマスの神学が、信仰を前提としない近代の読者にとっても理解可能なものとして受け止められてきた理由も説明がつくであろう。

* * *

Alexander Halensis, *Summa Theologica*, iussu et auctoritate B. Klumper, Tom. I, Firenze: Quaraacci, 1924.

Bonaventura, *Commentaria in quatuor libros Sententiarum, Tom. I, In primum librum Sententiarum, (In I Sent.)*, Opera Omnia, studio et cura Collegii S. Bonaventura, Tomus I, Firenze: Quaracchi, 1882.

Albertus Magnus, *Commentarii in I Sententiarum (In I Sent.)*, Opera Omnia, cura ac labore A. Borgnet, Paris: Vivés, 1893.

Albertus Magnus, *Summa Theologiae sive de mirabili scientia Dei (Summa Theologiae)*, Liber I Pars I, Quaestiones 1-50A, ed. D. Siedler P. A., W. Kübel et H. G. Vogels, Aschendorf, 1978.

* * *

Nouum Testamentum Latine, secundum editionem Sancti Hieronymi, ad codicum Manuscriptorum fidem recensurrunt J. Wordsworth et H. I. White, editio minor, London.